
海蛇

庵あん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海蛇

【Nコード】

N8300Y

【作者名】

庵あん

【あらすじ】

かの大いなる海神ポセイドンも、その瞳を愛したではないか。

光の無い世界。それはこの新月の夜空よりも、ずっと深い黒、ずっと深い闇。

深すぎて、溺れて仕舞いそうなくらい。

その暗闇の中で聞こえるのは、風に揺れる木立と、私たちの荒い息遣いと、甘美な喘ぎのみ。たどたどしく、けれど、しっかりと私の身体を這う少女の指先は何かを探しているみたく。或いは、身体中を這いずり回る蛇のように。指が、舌が、神経が、互いの身体を蝕んでいる。

溶け合って、私たちの神経が繋がってしまった様に。

それを引き剥がす罪悪感と理性は更に饗宴を盛り立てた。激しく、強く、狂おしく。

その白く、か細い指先は私の乳房の先端を弾いた。そして、摘まんだり、抓ったりしながら、私の耳元で彼女は囁く。妖艶に口角を吊り上げて。

ピアスを引きながら。

「痛い？」

ゾクゾクと何かが脊髄を這い上がった。

そんな私の変化を感じ取って、より一層、指先に力を込めて、爪を立てて。思わず漏れた痛みに喘ぐ悲鳴に似た吐息が、彼女の鼓膜を震わせると同時に彼女は、更に強く捻り上げる。

幼い彼女の軀を抱きしめた。しつとりと汗ばんだ皮膚が吸い付く。その黒く、長い髪を指でとかす。雪みたく白い背中に爪を立てる。華奢な背中が凍える様に震えた。胸から首筋を通った彼女の指が、

ゆつくりと私の唇をなぞる。そして、重ねた唇。絡みあつた舌が互いの唾液を私の口の中で混ぜ合う。

幾重にも巻かれた包帯によって閉ざされた彼女の瞳は私の姿は勿論、世界を認識することができない。だから、彼女は触覚で身体の形を確認するかのように、私の上に指を這わせた。冷たい爪の感触が、ゆつくりと皮膚を浸蝕する。

「いい匂い」

「そこは……」

「ちよつとザラザラしてるわね」

「ですから、先にシャワーをと……」

「ダメよ」

彼女の舌が腋を這う。

私は彼女の耳に口付けした。ほんのり、と彼女の汗の匂いを感じる。背骨の突起をなぞると、くすぐったそうに彼女は身を反らした。鎌首を上げた彼女の右手が私の乳房を掴む。まるで、鱗を持たない蛇に、全身を這い回られている様な。そんな終わりのない甘美な空間の中。

かのメドゥーサも、自身の欲望を無数の蛇たちで満たしたのだからか。

その全身に絡みつく斑は、その冷たい鱗は……。乳頭を甘噛みされて、口の中、そして、膣口から子宮の中へと容赦なく入り込む蛇たち。我が子の様な愛おしさで、彼女が迎え入れたそれらに意識の

外側で執拗に犯される神経は、どんな快楽を伝達するのだろうか。
胸から肋骨をなぞり、そして、下腹部へとつたう爪の感触に感嘆
の声を上げた。

「もうこんなにして……。穢らしい」

「そこは、抓らないで、ください……」

刺すような痛みが、駆け上がって。

最も敏感な部分に、それを着けるように命じられた時の、激痛と
享楽を反芻した。何も考えられなくなる程の痛み。冷たい金属の感
触と、灼けつく痛み。あの時、苦痛に喘ぐ私の声を聞きながら彼女
は自らを慰めていた。

甘酸っぱい匂いが鼻腔を通って、脳を揺らす。口に押しつけられ
た彼女の真っ白な恥部に舌を這わせた。喘ぎに混ざって聞こえる水
音は、次第に大きくなり、彼女の冷たい指の感触が深く突き刺さる。
その快感に全身を浸した。

深く。もっと深く。

無数の蛇に貪られる様に。

或いは、ウロボロスが自らの尾を呑み込む様に。

それは破壊と再生の象徴でなく、痛みと快楽の具現ではなからう
か。

彼女が目を覆う白い包帯を解いた。

色素のない瞳が、夜の闇に浮かび上がる。この瞳を初めて見たと
きは、凍りつく様な、そんな幻想に襲われた。それは背徳感の見せ
る白昼夢。そう、ポセイドンもその瞳を愛したではないか。恐らく
その瞳は世界で最も純粋な瞳だった。大いなる海神さえも、石みた

く、頑なに縛り付けてしまう程の。
白いシーツの上に彼女は細い体を横たえる。今度は私が上になつて。

彼女の口を犯した。舌を抜くと、混ざり合った唾液が糸を引いた。綺麗な鼻筋を通って彼女の眼球へ。舌先が瞳に触れた刹那、彼女は大きく身震いした。涙の味。程良い塩味を持った石化の呪いを解く特效薬。古の錬金術師がユニコーンの角と共に血眼で求めた、メドウーサの涙。

その眼球を舌で転がした。溢れ出る涙を舌で拭う。
彼女の吐息が熱を帯びた。桜色に上気した肌を撫でる。

「ケイト、ねえ、もっと……」

「痛くしちやいますよ？」

「構わないわ」

白く膨らみかけた胸の先端は、それでも固く尖って、快楽を求めている。

そして、その未発達性の器も。同様に。

温かく、ぬめり、とした感触が私の指を吞み込んだ。ベッドライトの青い光の中で、そこは艶やかに光沢を放っている。まるで、蛇の革の様に。美の女神アテナによって醜悪な姿に変えられた、蛇の女王も、その時ばかりは、しおらしくアテナの膝に縋ったのだろうか。自らの恥部をその傲慢な女王の口にあてがって。彼女を屈伏させたアテナは喜びと快楽に浸ったのだろうか。

私の様に。

ただ純粹に、快楽を貪り始めた従順な身体を支配する悦びに。

腕の中で、痛みと快感に悶える普段は傲慢な彼女も、こうなって仕舞うと堪らなく可愛いのだから、憎らしい。それから私たちは何度も求め合った。欲望に導かれるまま。潰えることのない享楽の果て。

幾重にも重なる螺旋の中へ

「もっと丁寧にして頂戴。前のメイドはもっと上手だったわ」

「申し訳ありません」

「相変わらず、愛想が無いわね。いい？ 私の一言で、私はあなたをクビにできるの。それはあなたのようなメイドでも理解しているでしょう？」

「はい。存じております。申し訳ありません」

彼女の黒く長い髪を櫛でとかす。

オレンジ色の淡い光の中で、彼女は無表情で俯いていた。素直になれないのは、私の所為なのだろうか。盲目というだけで誰からも疎まれ、その白い目は恐れられ、憐れみと失望の中で閉ざしてしまった彼女の瞳と心。その傷は癒えぬまま、恐怖を伴って彼女を痛め続ける。

藻掻けば、藻掻くほど、絡みつき、締め付ける荊の様に。

或いは、メドゥーサの髪　メデュシアナ　みたく。

アレクサンダーの鎧の胸部には、メドゥーサの首が刻まれていたと謂う。その目は絶望の象徴として、その血は殺戮と再生の象徴として。または、女神アテナの持つ神の盾アイギスとして……。幽閉されていた迷宮から解き放たれた蛇の女王の瞳は、その血生臭い場

所で何を見たのだろうか。二人の姉とは違って可死の軀に生まれた彼女は、どれほどの嫉妬と羨望をその血と共に撒き散らしたのだろうか。

母親を憎み、涙を流した夜はあったのだろうか。
誰かを愛しみ、笑ったことは……。

「ココア」

「はい？」

「喉が乾いたわ。さっさと持ってきてなさい」

「お言葉を返すようですが、お嬢様。もう夜も遅いですし、あまり甘いものを召し上がられてはお身体に障ります。紅茶になさいませんか？」

「ココアよ。いいから持ってきてなさい、愚図」

「それでしたら他のメイドをお使いください。尤も、現在、ココアとミルクを切らしてまして。今すぐにといいお嬢様の期待には添えないと存じますが」

「何とかしなさいよ」

「それでは、明日の朝一番で買い出しに行かせます。それまでお待ちいただけますか？」

「……まったく。もういいわ、紅茶で」

「畏まりました。それから、私はケイトで御座います。愚図ではありません」

「別に何でもいいのよ、愚図。早くなさい」

私はその悲しみと痛みを受け入れよう。そして、愛そう。メイドとしてこの家に売られ、幼くして彼女を生まされた母親として。母を知らぬ我が子を。精一杯の愛情を以て

海蛇

The S ad i s t i c L o v e S o n g

是にて、了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8300y/>

海蛇

2011年11月24日19時46分発行